

再生

櫛田棕子

ばあちゃんをお風呂に入れた。私の担当だった。熱いのがいいといってきかない骨と皮のばあちゃんと共に煮られた。ガラスープになった私たち。

ばあちゃんに薬を飲ませた。私の担当だった。嫌だと泣いてかぶりをふるところに匙を突きつけた。ごめんね。ごめんね。ごめんね。

父がばあちゃんが汚した下着を洗った。これは吊るし洗いだと。君が赤ん坊のころにもやったと。赤ん坊の世話は老人の世話。老人の世話は赤ん坊の世話。

介護用ミトンに寄せ書きをした。どんなメッセージをどんな思いでどんな顔をして書いたのかはもう忘れた。自分の便を掻き出さないように嵌められる手錠のようなミトンに何を書くべきだというのか。

ばあちゃんの背中をながすと垢が出る。ぼろぼろでる。からだが生まれ変わる証拠。ばあちゃんは生きようとしている。

ばあちゃんは薬をすてる。飲んだと嘘つく。ぼろがぼろぼろでる嘘をつく。ばあちゃんは死のうとしている。

認知症は赤ん坊にもどる病気だ。何もわからなくなる。何もかも忘れる。産んだ娘も可愛い孫も愛した伴侶も忘れてまっさらになる。赤ん坊になる。泣いて排泄して世話される。何も知らないわからない新しい人生が始まる。ばあちゃんは新しく生きようとしている。ばあちゃん生きよう。生きよう。生きよう。

学校から帰ると家に花輪が立っていた。ばあちゃんが死んだと私に知らせたのは父の電話でも母のメールでもなかった。